

主 題：旧約に見る神の救いのご計画Ⅶ
聖書箇所：創世記12章6節－13章18節

きょうもまた聖書を通して神様の救いのご計画について学びたいと思います。

創世記12章をお開きください。

先週、先々週とテレビを見ていましたらいろいろなニュースがありました。恐らく皆さんもごらんになったと思いますが、「日本死ね!」、ひとりのお母さんが子どもを保育所に入れられなくて、その悲痛な叫びを上げたことを見ました。それが国会でも話題になり、話し合われた様子を私たちは見ました。世の中にはいろいろなことが起きていて、私たちがなかなか共有できないような問題で悩んでおられる方が多くおられます。5年になります東日本大震災のこともありますし、私たちは多くのことについて知り、ともに祈って行くことが必要であるということを感じます。

また、東京オリンピックの聖火台がどこへ行ったということも今話題になっています。新しい国立競技場を作るに際して、聖火台が抜けているということで、文部科学省の担当大臣、オリンピックの担当大臣、またJSC（日本スポーツ振興協会）、それからオリンピックの組織委員会、それぞれが責任のなすり合いをしているような様相を呈して来ました。どこの責任か、私たちにはわかりませんが、もともと東京オリンピックで用いられた聖火台を今度のオリンピックの象徴にしようということで、場所が決まるまで東北に持って行って置かれているといういきさつがあったようですが、残念ながら新しい国立競技場が予算の関係で二転三転し、最終的にはコンペで二者が競り合って一つが決まりましたが、そこに聖火台がなかった。まるでトイレと風呂のない新しい家のように言われた方がありましたが、まさにそのようだと私は思いました。人間の考えることですから忘れることもあれば、だれかが考えているからと他人任せにしてしまうこともあるでしょう。最終的にはどこかが責任を取って、ちゃんとしたものを決めて行くことになると思います。このような騒ぎを見るにつけて、人間の考えることは本当に漏れが多く、計画性というものも時として変わるものだと考えさせられました。

一方、神様が私たちに教えておられる救いの計画というのは、本当に変わりのない一貫したものであるということをお私たちは聖書を通して教えられます。神様が放たれた救いの一本の矢は真っ直ぐに的を指して飛んで行く。そして神様の救いの計画そのものが実現される。私たちはこれから何があるか、今黙示録を通して学んでいますけれども、旧約時代、人間が造られたその時から神様は既に私たち人類を救うために一つ大きな真っ直ぐな計画を持っておられたということを知るのであります。きょうは第7回目になりますが、旧約に見る神の救いのご計画についてもう一度学びたいと思います。

★ これまでに学んだこと

さて、今まで私たちが学んで来たご計画の中から、信仰によって歩んだ人たちについてもう一度復習をさせていただきます。あの創世記3：15で女の子孫から救い主が与えられるという原始福音が示されました。神様は最初エデンの園で、善悪の知識の木の実をとって食べてはいけないという一つのルールを人類に出されました。これが唯一の神様のルールでした。人類がこれを守れば神様の前によしとされたのですが、残念ながらアダムとエバは罪を犯し、彼から全人類に罪が入った。すべての人は罪を犯したので神の栄光を受けられなくなっている、また罪の支払う報酬は死であると聖書は教えているのですが、アダム以降、神様は人類に特別なルールをお示しにはなりません。人々は自分の良心に従って、いかに神様の前に正しく歩むかを考えるべきだったのです。

1. 信仰による人々

1) アベル

さて、最初の信仰による人々の一番目、アベルについて私たちが知っていることは、カインによって殺されたということです。イエス・キリストはこのアベルについてマタイ23：35で「義人アベル」と言っています。アベルは「義人」、正しい人だった。ハバクク2：4で「正しい人はその信仰によって生きる。」と言っています。正しい人は神の教えを守り行なう人であると言っているのです。このアベルは神様を信じるということばは確かに出て来ませんでしたが、正しい人として神様の前を歩んだ人です。なおかつカインによって殺された人類最初の殉教者であると聖書は教えています。彼は私たちに神様を礼拝するにはどうしたらいいかということをお教えました。神様の前に彼が捧げたのは傷のない初子でした。神様はそれを見てよしとされた。一方カインが捧げたのは、彼が地を耕して得た作物でした。動物がよかったのか、作物がよかったのかという問題ではなくて、神様は捧げ物を捧げたカインとアベルそれぞれのどちらの心が正しいかをごらんになったのです。そして、アベルの捧げ物をよしとされた。

彼はその心によって神様が喜ばれる最善のものを捧げることができたということです。このことによって、捧げる物の大小ではなくて、捧げる人のそれぞれの心が大事であるということをおぼろげに教えられる。アベルは正しい礼拝とは何かを教えてくださいました。

2) エノク

また二番目のエノクは神とともに歩んだ人です。創世記5：22に「神とともに歩んだ」と記されています。そして彼は死を見ずに天に上げられた人です。その信仰は神に喜ばれたとヘブル11：5に記されています。彼は患難時代直前の空中携挙の一つのひな型であることを教えてくださいました。

3) ノア

そして三番目のノアは「昔の世界を救わず、義を宣べ伝えた」とⅡペテロ2：5でペテロが言っています。正しいものは一体何か——。人々が乱れた生活、罪の中を歩んでいた時に、彼は神様のことばを聞いてそのことばを忠実に実行した人として聖書は教えています。「まだ見ていない事柄について神から警告を受けた」、その時に神のことばに従い、「箱舟を造り」、「信仰による義を相続する者とな」った。彼の時代まで大雨が降ったり、あるいは洪水があつたりしたことはまだありませんでした。にもかかわらず神様が大雨を降らせ、洪水を起こして人々を滅ぼすから箱舟を造りなさいと言われた時に、まさかそんなことが起こるはずはないと彼は決して思わなかったのです。神様が言われたことだから必ずそのようになるだろう、だから箱舟を造りましょうと。そのことをばかにした人々は神様によって罪にさばかれたと聖書は教えています。彼はその義の行動によって、箱舟を造る信仰によって義を相続する者となった。

4) アブラハム

そしてアブラハムです。まだこの時はアブラムですが、召しを受けた時、どこに行くのか行き先を知らないで出かけた。創世記11：31、またヘブル11：8にそのように記されています。「信仰によって……召しを受けたとき、これに従い」、アブラムのその信仰の状態を聖書は教えています。

2. アブラムの召命 創世記12：1-3

1) 神が示される地へ行け。

そして前回学びましたように、アブラムは神様から召しを受けて示された地へ遣わされて行くのですが、創世記12：1-3、ポイントは神が示される地へ行け、「わたしが示す地へ行」けというのが神様の命令です。

2) 大いなる国民とする。

「そうすれば……あなたを大いなる国民」とする。「国民」ということばは領土と民、二つが合成されたことばです。すなわちアブラムを通して多くの人々が与えられ、やがて土地が与えられて、そこに国家を形成するということが神様によって約束されたと教えています。

3) あなたの名を大いなるものとする。

また「あなたの名を大いなるものとする」。アブラムは後に信仰の父、信仰者の父としてすべての信仰ある者から呼ばれるようになりました。

4) 地上のすべての民族はあなたによって祝福される。

また、「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」、彼の子孫であるイエス・キリストを通して、このイエス・キリストの十字架のみわざによって、彼を信ずる者すべてが国籍を問わず、イスラエル民族であるかそうでないかを問わず救われる。すべての民族はアブラムによって祝福されることを約束されたのです。

* なぜアブラムが祝福されたのか。

アブラムはどうして神様によって特別に召されたのか。この段階で彼を見る限り、私たちは彼が神様によって特別に召される何の理由も見出すことはできませんでした。彼の生まれた環境でしょうか？いいえ、彼の生まれた環境は、お父さんがいわゆる偶像崇拜の家庭を形成して、まことの神様を拝んでいない家庭でした。恐らく家族もそうであったでしょう。今で言うクリスチャンホームではなかったのです。アブラムは特別に良い子ども、よい人でしたか？いいえ、彼がすばらしい行ないをした、義なる人であったと、まだこの時点で私たちに知らされていませんから、行ないが原因ではなかったということも知ることができます。

彼の信仰もまだわかりませんでした。お父さんの言いなりでした。彼が最初に召命を受けたのはメソポタミアのウルでした。使徒7：2-4に「そこでステパノは言った。『兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父祖アブラハムが、カランに住む以前まだメソポタミアにいたとき、栄光の神が彼に現われて、』、ここで神様が現れた。そして「『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け。』』と言われました。：4 そこで、アブラハムはカルデヤ人の地を出て、カランに住みました。」「あなたの土地」、すなわちウルです。「あなたの親族」、お父さんの家族から離れて、神が示される地に行けと言われたのです。それでも彼は「カルデヤ人の地を出て、カランに住みました。」と書いてあります。カランもウルと

変わらない大きな町でしたが、偶像崇拜の盛んな町でした。父親のテラがアブラムを連れて、家族ともどもカランに行ったと聖書は記していますから、アブラムがどのようにウルでお父さんに働きかけたのか、あるいは父のテラが一方向的にアブラムを連れ出したのか私たちにはわかりませんが、とにかくウルは出ましたが、ハラン（カラン）に途中下車してしまうことが聖書によって明らかにされています。

I. 出立（創世記 12:6-9）

創世記 12:6を見ると、「アブラムはその地を通過して行き、シェケムの場、モレの榿の木のところまで来た。当時、その地にはカナン人がいた。」と、カナンの地に入った様子が記されています。そして残念なことに4-5節「アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがカランを出たときは、七十五歳であった。アブラムは妻のサライと、おいのロトと、彼らが得たすべての財産と、カランで加えられた人々を伴い、カナンの地に行こうとして出発した。こうして彼らはカナンの地にはいった。」と記されています。彼は75歳、奥さんのサライは65歳の時においのロトを連れてカナンで加えられた人々と財産すべてを持って出かけたと記されています。

1. シェケム 6-7節

やがて彼はカナンに入り、最初の地がシェケム（死海の左上方）です。ガリラヤ湖の左を通過してカラン（ハラン）から下りて来てシェケムへ入ったと見ることができます。このことばは「肩」という意味を持っていますが、神様の力を表すとも言われています。非常に古い町であったと教えられています。

・ モレの木とカナン人

そこで彼らはまず「モレの木」と「カナン人」というものを経験します。カナン人は現地人でした。このカナンの地に住む多くの民族の集まりですが、そこに既に先住民がいたということを知ることができます。そこに「モレの榿の木」とあります。なぜこんなことが書いてあるのかというと、「モレ」というのは「占い」や「導く」、「示す」という意味を持っています。そしてこの「榿の木」、テレビンの榿の木と言われていますが、大体全長15メートルぐらい、樹齢にすると数百年から千年ぐらい育っている非常に大きくて古い木です。ここでいわゆる偶像崇拜が行なわれていたそれぞれの神の占い師たちが集っていたと言われているので、偶像崇拜の一つの象徴の場所だということが考えられます。そこに最初に来た。

・ 神の顕現 7節

・ 初めての祭壇を築く。神を礼拝し祈った。

感謝することに、神様はそこでアブラムに現れます。創世記 12:7を見ると、「そのころ、主がアブラムに現われ、そして『あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。』と仰せられた。アブラムは自分に現われてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。」とあります。初めて彼は異教の地を出て、まことの神様に礼拝を捧げるために祭壇を築いたということ私たちは知ることができます。主の御名によって祈った、彼の正しい行動。神様に対して正しい礼拝をする。偶像に対してではなくてまことの神に対して礼拝を捧げる。神がアブラムに現れたのは2回目です。先ほど使徒7:2-4をお読みしましたが、ウルでも「栄光の神が彼に現われて」とありましたから、この現象は、目に見えない神様でありますけれども、アブラムに現れた。私たちにはどのような形で神様が現れたかわかりませんが、アブラムはそのことを体験しました。

2. ベテルとアイ 8節

そして彼はシェケムを出て、次に訪れたのは8節にあるように「ベテル」と「アイ」の間です。そしてそこで二度目の祭壇を築き、主の御名によって祈ったとあります。「ベテル」と「アイ」の中間の場所、「ベテル」は「神の家」という意味を持っています。「アイ」は「塚」、また「廃墟」です。神様の家と廃墟との間に立っている。恐らく彼は何が正しいかということを考えさせられたかと思うのですが、そこで二度目に神様に祭壇を築いて礼拝をしたと教えられるのです。

3. ネゲブ 9節

そして彼はさらに南に下って行きます。「ネゲブ」、死海の南西にあります。そこへ彼は下って行くのです。「ネゲブ」は「南」、あるいは「乾燥した地」という意味です。神様が約束されたカナンの南限の地点ですが、ここまで彼は下って来たのです。

II. アブラムの失敗 12:10-20

1. 飢饉 10節

そしてネゲブに到着したのですが、この地には飢饉があった。10節を見ると、「さて、この地にはききんがあったので、アブラムはエジプトのほうにしばらく滞在するために、下って行った。この地のききんは激しかったからである。」とあります。約束された南限の地ネゲブは乾燥した地、砂漠でした。そこでは恐らく彼らが食べるに十分なものはなかったでしょうが、なおかつ飢饉があって一層食べて行くには困難な状況があったことを私たちは知るので、エジプトへ行ったら何とかなる、恐らく食べ物豊富にある

に違いないとアブラムは考えて、彼はエジプトへ下って行ったのです。神様の指示を待たないで自分の考えによって彼は行動を決めたということを私たちはここで見ます。アブラムが遭った最初の試練、そして彼の安易な解決法の結果、失敗を生み出すのです。

◎ 彼はどうすればよかったのか。

先ほどの場所それぞれでは祭壇を築いてから祈り、神様を礼拝した。彼の子どもあるいは孫たちはどのようにしたかを聖書は私たちに少し教えています。

① イサクの場合

創世記 26 : 2-4 を見てください。「主はイサクに現われて仰せられた。『エジプトへは下るな。わたしがあなたに示す地に住みなさい。あなたはこの地に、滞在しなさい。わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福しよう。それはわたしが、これらの国々をすべて、あなたとあなたの子孫に与えるからだ。こうしてわたしは、あなたの父アブラムに誓った誓いを果たすのだ。そしてわたしは、あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与えよう。こうして地のすべての国々は、あなたの子孫によって祝福される。』と、イサクの場合はっきりと「エジプトへは下るな。わたしがあなたに示す地に住みなさい。」、すなわちカナンに住めと言われたのです。「これらの国々」、カナンの国々は「すべて、あなたとあなたの子孫に与える」と神様が言われたということを見ることができます。

② ヤコブの場合

創世記 46 : 1-4 「イスラエルは、彼に属するすべてのものといっしょに出発し、ペエル・シェバに来たとき、父イサクの神にいけにえをささげた。神は、夜の幻の中でイスラエルに、『ヤコブよ、ヤコブよ。』と言って呼ばれた。彼は答えた。『はい。ここにいます。』すると仰せられた。『わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下ることを恐れるな。わたしはそこで、あなたを大いなる国民にするから。わたし自身があなたといっしょにエジプトに下り、また、わたし自身が必ずあなたを再び導き上る。ヨセフの手はあなたの目を閉じてくれるであろう。』」神様はこう言われた。あのエジプトでヨセフが宰相になって、ナンバー 2 の立場になった時に大飢饉が起こります。そして彼は食べ物を蓄えるわけですが、一方このカナンの地にいたイスラエルの民、アブラム以下の人たちは食べ物がなくてエジプトへ下って行こうとしたのですが、創世記 12 章から始まったいろいろな歴史を彼らはよく知っていますから、この時エジプトへ行って大丈夫か、もちろん躊躇がありました。でもこの時は私はあなたがたとともにいるからエジプトへ行けと言われたのです。12 章では、アブラムには神様の直接的な指示を見ることはできませんでしたが、彼は飢饉があったにせよ、上から順番に下って来たのと同じようにネゲブからエジプトへ下る道を選んだのです。

私たちはともすれば自分の歩む道を簡単に選択してしまうことがあると言うのです。これは実はアブラムにとっては最初の試練でした。神様が彼に与えられた試練、約束された地にとどまるはずでしたが、彼はそのようにしなかったと言うのです。I コリント 10 : 13 にはたとえ試練があったとしても神様は脱出の道を備えてくださると示されています。どんな試練があっても神様が必ず脱出の道を備えてくださるからだ。私たちはみことばによってよく知っているのですが、アブラムはこの時そうしなかったということです。

2. 偽り 11-20 節

一つの失敗が次の失敗を生み出します。12 : 11-14 「彼はエジプトに近づき、そこにはいろいろするとき、妻のサライに言った。『聞いておくれ。あなたが見目麗しい女だということを私は知っている。エジプト人は、あなたを見るようになると、この女は彼の妻だと言って、私を殺すが、あなたは生かしておくだろう。どうか、私の妹だと言ってくれ。そうすれば、あなたのおかげで私にも良くしてくれ、あなたのおかげで私は生きのびるだろう。アブラムがエジプトには行って行くと、エジプト人は、その女が非常に美しいのを見た。』」のです。サライはこの時 65 歳でしたが、まだ非常に美しさを保っていた。アブラムは自分の妻ですから、きれいだと思うのは当たり前でしょうけれども、エジプト人が、他国人が彼女を見ても非常に美しいと。アブラムは心配しました。この美しい妻を見てエジプト人が自分のものとするために私を殺すかもしれないと恐れを抱いて、サライに「私の妹だと言ってくれ」と言うのです。「そうすれば、あなたのおかげで私にも良くしてくれ、あなたのおかげで私は生きのびるだろう」と。

妻のサライはどうなってもいいのでしょうか？そんなことはないですよ。本当は彼女に何があっても、私はあなたを守るから安心しておくれ、このエジプトへ来ても大丈夫だと言うべきではなかったでしょうか。でも彼は自分が助かるためにうそをつけたのです。私にも愛する女性がひとりいます。彼女は私がいつも教会で一日を過ごして家へ帰ったら、駐車場へ入るエンジンの音を聞いてカーテンを少し開けてのぞきます。私が車を降りて玄関の扉を開けて「ただいま」と言うと、「おかえり」と言ってくれます。そして家の中へ入ったら、私が着ている教会で着る服を脱がせてくれます。そしていつも家の中で着ている服を出してこれを着なさい、早くしなさいと、着せてくれるのです。出かける時には、今度はまた着るものと靴下を準備してくれます。ズボン履かせてくれて、靴下履かせてくれる。片

っ方の靴下は自分が履きます。そして手を引いて玄関へ連れて行ってきて、靴を並べてくれて、「いってらっしゃい、気をつけてね。赤信号止まりなさい、窓から手を出したらだめだよ」と心配してくれます。そして「バイバイ、じいじ」と言います。彼女は3歳になる孫ですから、サライとはちょっと歳が離れていますけれども、こんな彼女のために本当に自分のいのちは惜しくない、何があっても彼女を守りたいという思いがあります。ましてやアブラムは夫でしたから、サライを守るべきではなかったか。でも自分を心配した。彼の二番目の失敗ということになります。最初の選択を間違わなければアブラムはこのような誤りは起こさなかったのかもしれませんが、試練に遭った時、私たちは本当に慎重に行動しなければいけないということを教えられるのであります。

そしてサライが非常に美しいのを見たエジプト人、パロの高官たちはパロに彼女を推奨した。案の定彼女をパロの宮殿に召し入れるわけです。思ったとおりパロはこの美しい女性のためにアブラムによくしてくれた。「それでアブラムは羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男女の奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになった。」、たくさんの財産を得た。奥さんを身代わりとしてよかったですか。しかし、主は黙っていませんでした。アブラムの妻サライのことで、パロとその家をひどい災害で痛めつけた。「そこでパロはアブラムを呼び寄せて言った。」、あなたは何ということをしてくれたのか、「なぜ彼女があなたの妻であることを、告げなかったのか。」、あなたが妹だと言ったから、私は彼女を妻として召し入れたのだから。でも今はそうでないことがわかった。だからあなたの妻を連れてさっさとエジプトから出て行けと言って、部下に命じてアブラムたちをエジプトから送り出すわけです。

Ⅲ. 回復 13: 1-18

1. エジプトを出て再びネゲブへ 1節

このような危機的な状況がありましたが、そのようなアブラムであってもなお神様は彼を守ってくださり、無事にエジプトからまたネゲブへと戻って行くことができました。13: 1を見ると、「それで、アブラムは、エジプトを出て、ネゲブに上った。彼と、妻のサライと、すべての所有物と、ロトもいっしょであった。」と記されています。

2. ベテルとアイ 2-4節

最初に祭壇を築いた場所で、再び主の御名によって祈った。

3. ロトとの別れ 5-13節

しかしまだ問題はありました。何かというと、それはロトです。「あなたの親族を離れ」と神様はアブラムに言いましたが、まだロトを連れていました。そのためにロトが原因で一つの問題が起こります。13: 5-6「アブラムといっしょに行ったロトもまた、羊の群れや牛の群れ、天幕を所有していた。その地は彼らがいっしょに住むのに十分ではなかった。彼らの持ち物が多すぎたので、彼らがいっしょに住むことができなかった」。わかりやすい理由です。持ち物が多過ぎる、また家畜の餌場、水といったものが問題となって牧者間で争いが起きたのです。またそれ以外にもカナン人とペリジ人が住んでいたわけですから、本当に大変な状況にあったと思います。

そこでアブラムはロトに「どうか私とあなたとの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちとの間に、争いがないようにしてくれ。私たちは、親類同士なのだから。」と言うのです。「親族を離れ」と言われたのに、「親類同士」だからと彼は言うのです。もちろん人間的に見れば甥を愛するアブラムの気持ちは大事ですが、神様が言われたことは「離れなさい」でしたから、そのようにしなければいけません。そして彼はこう言います。「全地はあなたの前にあるではないか。私から別れてくれないか。」、やっとここで別れてくれと言うのです。「もしあなたが左に行けば、私は右に行こう。もしあなたが右に行けば、私は左に行こう。」と。アブラムのすばらしいところはここであなたがどこへ行くか選びなさいと言ったところでした。

「ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる以前であったので、その地はツォアルのほうに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。」。土地が非常に潤って「主の園のよう」、エデンの園みたいだと。そんなすばらしい場所が目に入ったと言うのです。この場所は今、塩の海（死海）の中にあるソドムとゴモラです。当時はまだ干上がっていたのでしょう。潤った地として非常によいところであったと。ロトは「エジプトの地のように」、「主の園のよう」なところを選択します。そして「東のほうに移動し」、「彼らは互いに別れた」。そして「アブラムはカナンの地」、神様が与えると言われたその地に住んだのです。ロトがカナンの地を離れて、ソドムとゴモラに住んだことは聖書によって明らかとなります。

4. 約束の確認 14-18節

さて14節以降、「ロトがアブラムと別れて後、主はアブラムに仰せられた。『さあ、目を上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなた

に、その地を与えるのだから。」、再度神様はアブラムに約束するのです。父を離れ、親族を離れました。アブラムは妻を除いてはひとりになりました。約束どおりの状態で、今約束されたカナンにいます。

「見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。」、当時まだアブラムとサライの間に子どもがいませんでした。でも神様は「あなたとあなたの子孫とに」この地を与えよう、以前には国を与えるとされました。そうして神様は約束の確認をアブラムにされたわけです。18節を見ると彼らは「天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの榿の木のそばに来て住んだ。」とあります。、「ヘブロン」というのは「交わり」という意味があります。そこで神様とアブラムは交わるわけです。そこに主のための三度目の祭壇を築きます。神様の約束を感謝したことだと思います。

IV 新約聖書の解き明かし

新約聖書はこれらのことについてどのように教えているか――。

1. 神のご計画：すべては神の栄光のために エペソ 1：4-6

まず、神様のご計画、私たちは今神様の救いの計画について学んでいるのですが、すべては神様の栄光のためです。エペソ 1：4-6 に「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。それは、神がその愛する方にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるため」だと。これが神様の目的なのです。「世界の基の置かれる前から……イエス・キリストによってご自分の子にしよう」として私たちを選んでくださった神様、それは神をほめたたえるためであると。

2. 信仰の本質：神が何度も保証されることでアブラムの心に確信が生まれた ヘブル 11：1-2

信仰の本質とは一体何か――。それは神様が何度も保証されることでアブラムの心に確信を生まれさせるためであるということです。ヘブル 11：1-2 に「信仰は望んでいる事ごらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人々はこの信仰によって称賛されました。」とあります。「保証」というのはギリシャ語で「ヒューポスタシス」ということばが使われていますが、「本質」とか「実態」という意味です。神様は本質を保証されるということです。リビングバイブルを見ますと、「願ひ事が必ず与えられるという不動の確信」と記されています。目には見えませんが、実態がある、本質がある。だから保証されている、確信がある。あの創世記 1：1 から神様は私たちの目に見えないことばで言われました。天地を創造される時、何々あれ、すると何々があった。目に見えないことばで目に見えるものができた。これが神様の御業なのです。約束も同じです。神様がこうすると言われたら必ずそのようになるということを確認するということです。昔の人々はこの信仰によって称賛されたのです。

3. まだ信じておられないあなたに：あなたが救われるために神はあなたの努力（人間の方法で）を必要とされていない ローマ 9：15-16

さて、まだ神様を信じておられない方がおられたら、ぜひお聞きいただきたいと思います。ローマ 9：15-16 に「神はモーセに、『わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。』と言われました。したがって、事は人間の願ひや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」、このように言われています。リビングバイブルで「あわれむ者をあわれみ」は「親切にしたい人に親切」にする、神様がこの人に親切にしようと思ったら親切にするとわかりやすいことばが使われています。「いつくしむ者をいつくしむ」、同じように情けをかけてやろうと思った者に情けをかける。すべて神様の側からの働きなのです。情けをかけられる人に何の理由もありません。立派な人でお金持ちで家柄がよくて行ないもいと。憐れみかける必要はありません。そうではない。罪の中に住んでいるひとりひとりの罪人がそのままでは神様によってさばきを受けて滅ぼされる、そのような人にあわれみをかけて親切にしてやろうと神様は思われたと言われているのです。私たち造られた者は、神様の救いのみわざが本当にただ恵みによってなされたということをよく知っています。まだ信じておられない方がいたら、本当に信仰するという事は難しいことですが、まず最初に足を一歩踏み出さなければならぬ。アブラムがあのカナンに地から一歩踏み出した、それは神様のみことばに忠実に従って歩み出したからです。彼がすばらしかったからではありませんが、そのようにして信仰の一歩を踏み出した。まず一歩を踏み出すことが大切だということをよく知っていただきたいと思います。

私たちはアブラムまたあのテラと同様に偶像崇拜の国、日本に住んでいます。多くの神々や手で造られた仏像、神像が存在し、多くの日本人は抵抗なくそれを受け入れています。生活環境がすべてですから、お付き合いもそれらを守って行かなければ困ることもあります。サタンはそのような環境を巧妙に用いて多くの人々を神様の目から背けているのです。神様の救いの計画は本当の的に向かって真っ直ぐですが、そちらを見せないように悪魔は働いているということです。アブラムのことを思って、ぜひそのような環境から一歩踏み出さなければならぬ、また既に神様を信じておられる方はそのようなところから救い出された神様のみわざに心から感謝してともに歩みたいと思います。